伊佐ヒノキの流通と来歴について

鹿児島県林業試験場 東中 修

1. はじめに

鹿児島県の伊佐地方のヒノキは，近年材が軟らかく加工が容易である，光沢が美しい，樹脂が多いので耐用年数が長い，役物がとれる，曲りが少ない等の特質のため，近年，関東・関西市場で優良材として広く認識されるようになった。しかし，関東，関西市場で名声を博している伊佐ヒノキがどうして明治末から昭和の初めにかけて伊佐地方で大面積に植栽されたのか，大量の種子をどこから持ってきたのか，はっきりしていない点も多かったので，今回そのルーツを探ってみた。

2. 伊佐ヒノキの現況

伊佐地方の森林の現況は表－1のとおり国有林13,296 ha，蓄積1,615千m³，民有林13,721 ha，蓄積1,364千m³であり，国有林が全森林面積の50％近くを占めている。この中で国有林，民有林全体のヒノキ林の面積，蓄積をみてみると，面積で13,961ha，蓄積1,201千m³であり，伊佐地方の総森林面積の52％，総蓄積の40％を占めている。又，昭和50～54年度5カ年間の樹種別造林実績をみてみると，国有林，民有林を合計した総造林面積2,299 haのうち，ヒノキの植栽が1,886 haで82％を占めている。このほか大口営林署の既往の造林地を調査してみると，山腹下部の肥沃地にスギ，山腹上部にヒノキを植栽しているが，ヒノキの生育がずっとよい。

これからみても伊佐地方における造林適木としてのヒノキの重要性がうかがえる。しかし，表－1をみるとわかるが，7～10齢級のヒノキが極端に少ないことから10年後のヒノキ原木不足が懸念される。

3. 伊佐ヒノキの素材生産量

表－1をみるとわかるが，民有林の場合ヒノキ林7,352 haのうち6齢級以下が7,126 haで97％を占め，ほとんど若齢林ばかりである。従って現在伊佐ヒノキ優良材として関東，関西地方へ出荷されている製材品の原木はほとんど国有林材で占められており，民有林材は皆無といってよい。

昭和51年から55年までのヒノキ素材年生産量をみてみると，国有林は20～25千m³を上下し，ほとんど変化がない。民有林材も年間5千m³程度生産されているが，これは間伐材等の小径木であり，ほとんどが地場で消費されている。

4. 伊佐ヒノキの流通と製材価格

伊佐ヒノキの製品の流通をみてみると，製材品の主な出荷先は関東，関西方面であり，関東市場に4割，関西市場に4割で，全体の約8割をこの方面へ出荷している。しかし，金額では関東市場の方が役物などの高級品の出荷が多いせいか，関西市場の約2倍に達している。伊佐ヒノキの県内消費量は今まで柱材にスギの割角を主に使っていた関係上，約1割程度であったが徐々に増加している。また製材品は柱，土台，敷居が主体である。大口林産協業組合における製材価格のききとり調査による一例をあげると柱材1m³当り2等材7万円，1等材11万円，役物で小節材20万円，上小節材25万円，1面無節材30万円，2面無節材40万円，3面無節材50万円，4面無節材80～150万円となり，高品質材ほど付加価値がついている。

5. 伊佐ヒノキの来歴

前述のように関東，関西で優良材として認識されている伊佐ヒノキ材はほとんどが国有林材で，まだ民有林にはみるべきものがない。したがって伊佐ヒノキの来歴について述べるには国有林の成立から説明しなければならない。伊佐地方の国有林は他の国有林と同じく明治2年の藩籍奉還によってこれまで薩摩藩有であった林野が官林として国の所有となったものである。

明治19年4月大小林区署官制が制定され鹿児島県には鹿児島大林区署が開設された。伊佐地方には大口営林署の前身である牛山派出所が設置されている。

開設当時の仕事は国有林の境界整備が主要業務であったが，明治32年に特別経営事業が開始され，国有林の未立木地を主体に新植が本格化した。大口営林署保存の例規綴によると，明治40年6月1日付の

鹿児島大林区署から大口小林区署へ通知された特別経営事業の造林計画書には，明治40～47年のわずか8年間に4,580 haの新植が計画されている。この造林計画は現在の大口営林署の総森林面積が13,296 haであるのを考え合せると相当大規模な造林計画であった。

造林計画の樹種を見てみると，アカマツが2,115 haで全体の約半分を占め，次にスギ，クス，ヒノキの順となっている。しかし，アカマツ造林は過去の造林台帳を見てみると，大正初期にいたりマツケムシの大発生等の原因により，その大部分が不成績に終っている。

そうして大正中期から昭和初期にかけてアカマツの下木植栽としてヒノキ，スギ，クス等の造林が実施されている。造林台帳から明治7年～昭和14年の間に植栽された主要造林樹種と面積を拾い出してみると，ヒノキ2,844 ha，スギ2,242 ha，クロマツ1,023 ha，アカマツ564 ha等となっている。

このように大面積に植栽されたヒノキの種子をどこから入手したかは今まではっきりしていなかったが，大口営林署保存の苗木養成台帳（明治43年～昭和18年大丸苗圃）を見てみると，大正2年奈良県吉野地方より購入したのをはじめ伊佐地方の民有林，社寺有林，高鍋，多良木，水俣，菊地，熊本，人吉，佐賀，八代の各営林署，大口営林署管内の国有林などいろんな方面より入手しており，これらの種子を大口営林署直営の芳ケ丸，大丸の各苗畑で苗木に養成し植栽していたことがわかった。

したがって日本の各地域にヒノキの品種があるとすれば，現在の伊佐ヒノキは各品種の混成群であるといえる。

表－1　伊佐地方（大口市・菱刈町）森林現況表

（面積：ha，蓄積：千m³）

国・民・別	人・天・別	樹種別 ＼ 齢級	1～2 面積	1～2 蓄積	3～4 面積	3～4 蓄積	5～6 面積	5～6 蓄積	7～8 面積	7～8 蓄積	9～10 面積	9～10 蓄積	11以上 面積	11以上 蓄積	合計 面積	合計 蓄積
国有林	人工林	すぎ	108		533	25	954	122	182	36	91	25	346	128	2,214	336
		ひのき	2,147		2,274	95	1,150	127	97	18	148	43	793	296	6,609	579
		まつ			78	5	50	5	7	1	3	1	78	22	216	34
		広葉樹	5		4		90	12	41	8	66	18	249	86	455	124
	天然林		128		180	9	192	20	610	91	490	95	1,361	325	2,961	540
	その他														841	2
	合計		2,388		3,069	134	2,436	286	937	154	798	182	2,827	857	13,296	1,615
民有林	人工林	すぎ	308		587	65	610	139	63	21	45	20	45	22	1,658	267
		ひのき	2,090		3,068	251	1,968	308	119	28	63	20	44	15	7,352	622
		まつ	6		240	24	423	57	50	9			1	1	720	91
		他針葉樹			2										2	
		広葉樹	7		6		10	2	2						25	2
	天然林	まつ	1		28	3	81	12	26	5	3	1			139	21
		他針葉樹							7	1	1				8	1
		広葉樹	112	1	783	56	1,644	191	664	89	138	19	31	4	3,372	360
	その他														445	
	合計		2,524	1	4,714	399	4,736	709	931	153	250	60	121	42	13,721	1,364
総計			4,912	1	7,783	533	7,172	995	1,868	307	1,048	242	2,948	899	27,017	2,979

資料：国有林，民有林とも昭和55年度森林計画調査

参考文献

(1) 暖帯林：360号，18～25，1976

(2) 暖帯林：361号，42～46，1976

(3) 大口営林署保存の明治・大正・昭和の例規綴・造林台帳・苗木養成台帳